

VII-1 群馬県における総合的な学習の授業と評価の工夫

(1) 総合的な学習への取り組み

① 最近の研究動向

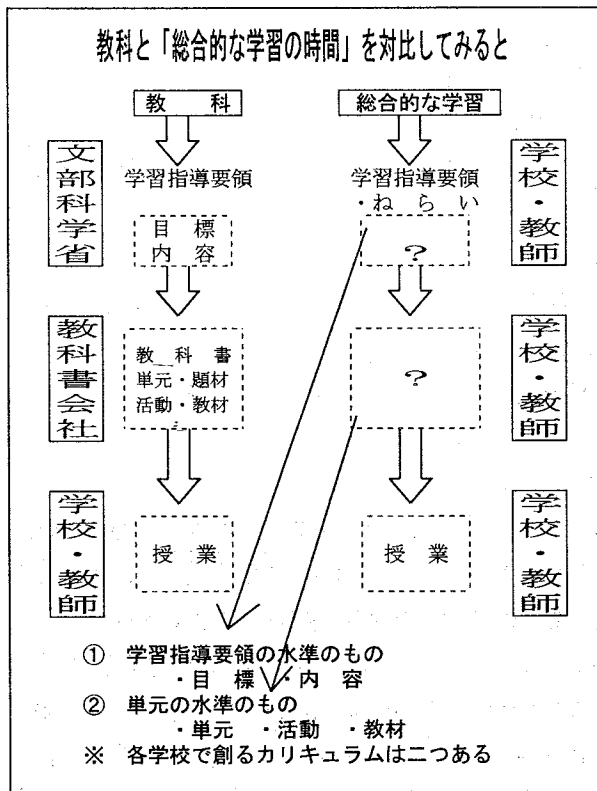
「総合的な学習の時間」の実践が進むにつれて、また、中央教育審議会への諮問から答申までの動きといった情報もあり、総合的な学習を進める上での課題が明確になってきている。その課題の中核となるものは内容編成にあるといえる。多くの学校では、これまでに総合的な学習の活動計画は作成されている。しかし、教科等の学習指導要領にあたる目標及び内容の編成が未整備のため、評価規準が作れず評価ができないなどの問題が出てきている学校もある。総合的な学習を通してどんな価値的なことを児童生徒に身に付けるか。それが身に付いたか評価し、次の指導に生かすようにする。さらには、自己学習力の育成、外部への説明責任も視野に入れた研究の一層の推進が求められている。

② 「内容系列表」の作成

②-1 その作成の必要性

平成15年10月7日の中央教育審議会答申『「総合的な学習の時間」の現状と実施上の課題等』の文中に『…例えば、「総合的な学習の時間」の「目標」や「内容」は、各教科等と異なり学習指導要領に示されておらず、各学校においては、学習指導要領に示された「総合的な学習の時間」の趣旨及びねらいを踏まえ、具体的にこれを定めて計画的に指導を行うことが求められる。…』という記述がある。

図1 教科と「総合的な学習の時間」の比較



この「目標」と「内容」とは何か、これは各教科等の学習指導要領に相当するものである。これを定めずに学習活動を行ったらどうなることになるだろうか。ここで、教科と「総合的な学習の時間」を比較しながら考えてみたい。

教科は、文部科学省が学習指導要領の「目標」と「内容」を作成する。学習指導要領には2章以降に各教科、道徳、特別活動それぞれの「目標」と「内容」が系統的に定められている。

次に、学習指導要領の「内容」を授業を通して実現できるように、教科書会社が教材を決め、単元・題材を作り、教科書を編纂する。

そして、各学校で先生方が学校、地域、児童生徒の実態等を考えて教科書の単元・題材に調整を加えながら授業を行っているのではないだろうか。あるいは、学

習指導要領を足場にして独自の教材を開発したり、単元・題材の開発を行っている学校もあるかと思う。

では、「総合的な学習の時間」についてはどうだろうか。〈図1〉に教科と「総合的な学習の時間」の授業までの流れを示してみた。「総合的な学習の時間」には、二つのねらいが示されているだけである。では、だれがそれを創るかといえば、各学校で先生方が創らねばならない。さらに、各学校で創った「目標」・「内容」を足場にして、学校、地域、児童生徒の実態から適切であると思われる教材を決めたり、単元を開発したりしなければならない。だれがそれを行うのかといえば、これも各学校で先生方が行わなければならない。最後に授業を実施し、その結果を評価してカリキュラムの修正を続けていくわけである。各教科等も「総合的な学習の時間」も基盤の整備においては同じ手続きを踏むことになるといえよう。

②-2 その特質

内容の編成にあたって～ねらいは「生き方」～

内容編成にあたって学習指導要領総則に示されている「総合的な学習の時間」の二つのねらい（資料1）がよりどころとなる。

資料1 総合的な学習の時間のねらい

- (1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- (2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。

この二つのねらいと、先行した教育課程審議会答申（資料2）を比較してみると内容的に「総合的な学習の時間」のねらいが①～④の四つに整理できることが分かる。

資料2 教育課程審議会答申（平成10年7月29日）

- ① 「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」
※(1)とそのままである。いわゆる「生きる力」の知的側面である。
- ② 「情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表、討論の仕方などの学び方やものの考え方を身に付けること」※(2)の冒頭の部分である。
- ③ 「問題の解決や探求活動に主体的・創造的に取り組む態度をそだてる。」
※(2)の2番目の文節である。
- ④ 「自己の生き方についての自覚を深めること」
※(2)の文末の自己の生き方を考えることができるようにすることと同じである。（※は、筆者）

資料2の①～③は、「学び方」にかかわるねらいであり、④は、「生き方」にかかわるねらいといえる。ここで、改めて教育課程審議会の「教育課程の基準の改善のねらい」（資料3）を振り返ってみると、上記の①～③は、イの「自ら学び、自ら考える力を育成すること」に重なる。したがって、①～③は「総合的な学習の時間」のみならず、各教科、道徳、特別活動をも含めた教育課程全体を通して目指すべきねらいといえよう。「学び方」にかかわるねらいは「総合的な学習の時間」でも目指すが、「総合的な学習の時間」特有のねらいではない。残る④こそが「総合的な学習の時間」特有のねらいと考えられる。

資料3 教育課程の基準の改善のねらい

- ア 豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること
- イ 自ら学び、自ら考える力を育成すること
- ウ ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かした教育を充実すること
- エ 各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること

「総合的な学習の時間」には、このように「学び方」と「生き方」の二つのねらいがあり、「学び方」は「生き方」を主体的、問題解決的に探究することとの関連において身に付けるものといえよう。

以上のことを踏まえ、各学校で内容編成（内容系列表）する際の留意点について述べる。以下のような視点が考えられる。

- ア 「総合的な学習の時間」の“ねらい”には、学び方と生き方の二つが示されている。内容編成は、主に自己の生き方を考えられるよう具体化を考えて作成する。
- イ 内容については学習指導要領で示された三つの課題を参考にする。先進的な実践などを参考にして例示されたものであり、よりどころとすると無理がない。
- ウ これまで実践してきた単元を通して、どのような子どもの育ちが現れたか、あるいは、現れる可能性があるのかを教師間を出し合って文章化する。その際、学年の発達段階に沿って内容項目の関連性や発展性、系統性を考慮して内容を配置する。
- エ 内容を活動や教材のレベルで記述すると自由度が制約されてしまうので可能な限り資質・能力で書き、教材や活動を含まないようにする。各教科等の指導要領の内容に相当するものなので、抽象度の高い文章となるようにする。
- オ 単元を修正しながら実践しても、うまくいかない場合は内容自体を変えていくことも必要である。常に、授業や子どもの実態をとらえて内容系列表を修正し続けていくことが必要である。

次に、このような点に留意しながら作成された「富岡市立一ノ宮小学校の内容系列表2003年版」と「内容系列表 群馬県教育センター試案2003年版」を掲載することになると（小学校と中学校を分けて掲載）、次頁のようである。

表の左側の「国際理解」「情報」「環境」などが領域である。算数科でいえば内容領域（「数と計算」「量と測定」「図形」など）に相当するものといえよう。そして、領域の内容欄のア、イ、ウなどが内容項目になる。これは、領域の目標を意味的に分析し、要素に分解した結果から導き出されたものである。算数科でいえば「数と計算」領域の下にある「分数の乗法及び除法の意味について理解し、それらを適切に用いることができるようにする」や「図形」領域の「身近にある図形について、その概形をとらえ、およその体積を求めることができるようにする」などの内容項目に当たる。

一方、これらの内容項目を学年発達（ここでは二学年段階ごと）に応じて具体化する。

このように、縦列に内容（スコープ）を、横列に校種・学年別の児童生徒の発達的特質（シーケンス）を配置しながら内容を編成していく。

教科では、子どもの育ちを評価していく場合、目標・内容から評価規準を設定し評価していく。「総合的な学習の時間」についても同じことがいえよう。子どもたちにどのよう

夢・人・里の時間の目標

夢人里の時間

目標・内容・評価の系列表

「夢を求め人に学び里に生きる」

〇具体的な活動や体験を通して、地域や身近な自然・社会・文化にふれ、自らの課題を見つけ、見通しをもって課題に取り組む意欲を育て、学び方や調べ方の技能を身に付け、仲間とともに協力して解決を目指し生活の向上を図ろうとする力を育成する。

中学年具体目標

- ①身近な地域のもの・人・ことに興味や関心をもち、そこから課題を見つけ、自分で解決しようとする。
- ②身近な地域やそこで住む人々や自分なりの方法で表現しようとする。
- ③自分自身や身近な地域とそこに住む人々や生活のよさを気付き、友だちと協力して、それを広く周囲に知らせようとする。

高学年具体目標

- ①地域や身近な自然・社会・文化に興味や関心をもち、そこから自分たちの解決すべき課題をつかみ、有効な方法を選んで解決しようとする。
- ②身近な地域やそこで住む人々や自分なりの方法で表現しようとする。
- ③自分自身や身近な地域とそこに住む人々や生活のよさを気付き、友だちと協力して、それを広く周囲に知らせようとする。

自己の生き方を考える視点



中学年の内容

- ①自分たちの生活と地域の環境との間には様々な関連性があることに気付き、で環境保全に取り組もうとする。
- ②健康的な食生活に必要な事柄や食の問題に関心をもち、それを表現するために必要な習慣・態度を身に付ける。
- ③自分の身の回りに、様々な人がかかわり合っており、共に生きていることに気付き、互いに理解し、信頼し、助け合おうとする。
- ④周囲の人々や特にお年寄りと接し、お年寄りや障害をもつ人々への敬意・思いやりをもち、温かい気持ちで接しようとする。
- ⑤身の回りの情報を正しく選択し活用するとともに、情報機器を積極的に利用しようとする。
- ⑥地域の人々が生活をよりよくするたために様々な工夫や努力をしていることに気付き、自分なりに協力できるようとする。
- ⑦郷土の歴史や文化、先人の遺業、外国の人々の生活や文化について学んだり、外国の人々と交流することを通して、日本と外国との違いを知るとともに、世界の国々の伝統的な施設や行事に興味をもち、これらに親しみながら、そのよさを大切に見直すようとする。

高学年の内容

- ①環境とのかかわりから自分たちの生活を見直し、関連性について考えながら、身近な環境の保全に積極的に取り組もうとする。
- ②健康を維持するために、よりよい食生活を表現しようとする実践的な態度を身に付ける。
- ③自分たちの生活は、人々の支え合いや助け合いの上に成り立っていることに気付き、人権が尊重される社会の実現に努力しようとする。
- ④お年寄りや障害をもつ人々への敬意・思いやりをもち、温かい気持ちで接しようとする。
- ⑤身の回りの情報を正しく選択し活用するとともに、情報機器を効果的に利用しようとする。
- ⑥地域の人々が生活をよりよくするたために様々な問題に気付き、自分の考えに基づいて、解決のために努力できるようとする。
- ⑦日本や世界の国々の歴史や文化について学び、様々な国の人々との交流を通して、お互いの文化を尊重し、大切にしようとする。
- ⑧地域に残る文化的伝統的な施設や行事に積極的に参加し、自分のできることは何かを考え、実際に努力しようとする。

評価の観点

- 学習活動への関心・意欲・態度
- 総合的な思考・判断
- 学習活動にかかわる技能・表現
- 知識を応用し総合する力

中学年

- ・身近な地域のもの・人・ことに興味や関心をもち、自分に取り組む課題を進めようとする。
- ・友だちを助けようとする。
- ・活動に取り組むいろいろな人々や生活のよさを認めながら自分の生活や地域に貢献しようとする。
- ・学習した内容について自分なりに考え、よいと思う方法で学習を進めようとする。
- ・自分なりに活動の計画を立て、見直しをもって学習しようとする。
- ・活動を振り返り、自己の反省点、改善点について考える。
- ・必要な情報をいろいろの方法で収集し、学習に活用しようとする。
- ・気付いたことや感じたことを自分なりにまとめ、表現しようとする。
- ・自分の住む地域の自然、社会、文化の様子やそこに住む人々のよさを知ることができる。
- ・学習全般を振り返り、その意味を自分なりに理解し、そこから得たことを、自分の生活に役立てる。

高学年

- ・地域や身近な自然、社会、文化に興味や関心をもち、そこから自分たちが解決すべき課題をつかみ、進んで取り組もうとする。
- ・友だちを助けようとする。
- ・活動に取り組むいろいろな人々や生活のよさを認めながら自分の生活や地域に貢献しようとする。
- ・学習した内容について自分なりに考え、よいと思う方法で学習を進めようとする。
- ・自分なりに活動の計画を立て、見直しをもって学習しようとする。
- ・活動を振り返り、自己の反省点、改善点について考える。
- ・必要な情報をいろいろの方法で収集し、学習に活用しようとする。
- ・気付いたことや感じたことを自分なりにまとめ、表現しようとする。
- ・自分の住む地域の自然、社会、文化の様子やそこに住む人々のよさを知ることができる。
- ・学習全般を振り返り、その意味を自分なりに理解し、そこから得たことを、自分の生活に役立てる。

姿の子どもすぞめ

領域	領域の目標	領域の内容	各学年の内容	
			小学校3・4年	小学校5・6年
国際理解	人と人との相互理解・相互交流を基本に国際化の進展に対処することができるよう、日本や世界の国々の歴史や文化に関心をもち、異文化交流を通して異文化を理解し尊重し、国際社会の一員として共に生きていくことのできる資質や能力を育てる。	ア異文化理解及び異文化尊重の態度 イ共生（国際交流・協調） ウ地域や自国の歴史や伝統文化等の理解及び自己の確立 エ外国語によるコミュニケーション	ア世界の様々な国の歴史や文化に進んで親しみ、それぞれのよさに気く。 イ様々な国のの人々と交流し、誰とも仲良く助け合おうとすることができる。 ウ郷土の文化や先人の偉業、歴史について調べ、興味・関心をもつ。 エ外国語に興味・関心を持ち、歌や言葉に親しむ。	ア世界の様々な国の歴史や文化について理解を深め、視野を広げる。 イ様々な国のの人々と交流し、それぞれの国のよさを尊重すると共に、大切にしようとする。 ウ日本の歴史や伝統、文化について学び、大切にしようとする。 エ外国語に興味・関心を持ち、簡単な日常会話に慣れ親しむ。
情報	様々な学習や生活との関連において、多くの情報の中から自分に必要な情報を収集・選択し活用することができる。情報の積極的かつ責任ある発信ができる資質や能力を育てる。	ア情報収集と活用 イ責任ある情報の発信	ア課題意識をもって、必要な情報を収集・選択し、生活に役立てようとする。 イ相手の気持ちを考えた情報の発信ができる。	ア多様な情報源を用いて、目的に応じた適切な情報を収集・選択・整理し、生活に生かすことができる。 イ受け手の願いや状況、メディアの特性などを考慮し、責任ある情報の発信ができる。
環境	身近な自然に積極的にかかわり、自然のもつ豊かさや大切さに気付き、生活と環境とのかかわりについて理解を深め、自然と共生し、自分にできる方法での環境保全やよりよい環境を創造する資質や能力を育てる。	ア自然に対する感受性や環境への関心 イ環境問題と生活様式とのかかわりについての理解 ウ環境保全やよりよい環境創造のために、主体的に行動する実践的態度	ア様々な体験活動を通して、身近な自然に親しみ、自然の大切さに気付く。 イ身近な環境問題を知り、それは自分たちの生活と深いかかわりがあることが分かる。 ウ環境問題の解決や環境の保全、よりよい環境の創造を目指した地域の人々の気持ちや取組、関係機関の取組などを知り、自分にもできる方法で実践しようとする。	ア自然に対する豊かな感受性や環境に対する関心を高め自然を大切にしようとする。 イ環境問題の現状について、科学的な方法を用いてとらえると共に、自分たちの生活とのかかわりについて考える。 ウ環境問題の解決やよりよい環境創造を目指した取組が抱える構造的な問題について認識を深め、その上で、自分たちの生き方を振り返り、日常実践に移すことができる。
福祉	自分を含め、様々な人々がそれぞれに生きがいをもって生きようとしていること、そのためにお互いに助け合	ア他者への尊重・尊敬・思いやりなどの豊かな人間性	ア身近にいる高齢者、年少者、障害者などかかわりながら、それぞれの人の存在の大切さに気付き、温かい気持ちで接する。	ア様々な人々とのかかわりを通して人は生きがいをもって生きていることや互いに助け合っていることを理解し、他者を尊重し、思いやりをもって接する。

社	<p>っていることを理解し、より一層充実した福祉社会の実現に貢献する資質や能力を育てる。</p>	<p>イ福祉にかかわる社会の特質・問題の理解と、介護・福祉などの課題についての認識</p> <p>ウよりよい福祉社会実現のために、主体的に行動する実践的態度</p>	<p>イ様々な人々の置かれている社会的状況を知らると共に、身近なところに配慮や工夫があることが分かる。</p> <p>ウ身近な福祉問題の解決の方法やみんなが幸せに暮らせる社会について考え、自分にもできることを実践する。</p>	<p>イ日々の生活は人々の支えや助けによって成り立っていることや福祉社会の現状や問題点を知り、福祉に対する認識を深める。</p> <p>ウみんなが生き生きと充実した生活を送ることができる福祉社会とはどんなものなのかを考え、福祉問題の解決やより充実した福祉社会を実現するために自分ができる活動を進んで実践しようとする。</p>
生命・健康	<p>生命のすばらしさや尊さに気づき、自他の生命を尊重する心をもったり、心身共に健康で安全な生活を営んだりすることができる資質・能力を育てる。</p>	<p>ア生命を尊重し、大切にしようとする態度</p> <p>イ健康で安全な生活についての理解及び実践する能力や態度</p>	<p>ア動植物の生体や生育環境に関心をもったり、自分の成長を振り返ったりする活動を通して、生命のすばらしさや大切さに気づき、生命を大切にすることができるようにする。</p> <p>イ健康で安全な生活を送るために必要な基本的な生活習慣の大切さに気づき、自分の生活を振り返り、よりよい習慣や態度を身に付けようとする。</p>	<p>ア生命誕生の神秘を知り、自分自身の命が周りの人々とのかかわりの中で生まれ育まれてきた尊いものであることを実感し、すべての生命を慈しみ、尊重しようとする心をもつ。</p> <p>イ自分たちの生活の現状から病気やけがの予防、健康増進のメカニズムを理解し、自分の生活を見直して、よりよい生活環境を創造することができるようにする。</p>
地域	<p>自分たちが暮らしている地域に愛着をもち、家庭や学校を含めた地域の生活上の諸問題について理解を深め、自他を尊重しつつ、地域社会の一員としてよりよい民主的な生活の実現に意欲的、協力的に取り組もうとする資質や能力を育てる。</p>	<p>ア地域の伝統・文化・行事・生活習慣・政治・経済・産業などの現状や問題点の理解</p> <p>イ地域や学校等の行事や活動、生活上の問題等の解決に向けて自他を尊重して協力的に取り組もうとする態度</p>	<p>ア地域探検や地域を支える人々との交流などを通して、地域の人々の思いや願いを知ると共に、地域への関心や愛着をもつ。</p> <p>イ地域社会の一員として、地域の生活や文化等を守り、受け継ぐと共に、よりよい郷土を創るために自分たちのできることを考え、取り組む。</p>	<p>ア地域の伝統、文化、歴史、産業などの特色、それらを支える人々の存在や取組を知ることを通して、郷土への愛着を深める。</p> <p>イ地域社会の一員としての自覚をもち、地域の抱える問題点を理解した上で、自分たちの地域での生活や文化を守り、発展させていくための方法を考え、取り組む。</p>
進路	<p>職業の大切さや労働の意義について理解すると共に、自己の適性や将来について考え、個性豊かによりよく生きていくことができる資質・能力を育てる。</p>	<p>ア具体的な活動や体験を通しての職業観・労働観の拡充</p> <p>イ自己の価値観の確立</p>	<p>ア家庭や学校、地域での仕事にふれ、それらが自分たちの生活を支えていることを知り、働くことの大切さに気付く。</p> <p>イ身近な人々の様々な姿や職業に対する思いや気概にふれ、その生き方に関心をもち、自分の姿を見つめる。</p>	<p>ア職業調べや職場見学、地域の人と共に働くことなどを通して、働くことの喜びや苦勞、それぞれの職業の大切さを実感する。</p> <p>イ自己の適性や将来について考え、なりたい自分に向かって、自己をより高めていこうとする。</p>

領域	領域の目標	領域の内容	各学年の内容	
			中学校1・2年	中学校3年以上
国際理解	人と人との相互理解・相互交流を基本に国際化の進展に対処することができるよう、日本や世界の国々の歴史や文化に関心をもち、異文化交流を通して異文化を理解し尊重し、国際社会の一員として共に生きていくことのできる資質や能力を育てる。	ア異文化理解及び異文化尊重の態度 イ共生（国際交流・協調） ウ地域や自国の歴史や伝統文化等の理解及び自己の確立 エ外国語によるコミュニケーション	ア他国の歴史や文化への関心を高めると共に、そこに見られる共通性や差異を理解し尊重しようとする。 イ異なる立場や考えの人、外国人などと協調し活動しようとする。 ウ自国のよさを見つめ、日本人としての自覚をもち、自己の在り方を考えようとする。 エ外国語によるコミュニケーションを積極的に図る。	ア他国の歴史や文化、伝統を包括的・体系的に理解し尊重しようとする。 イ様々な国の人々と積極的に交流し、国際親善に努めようとする。 ウ国際社会の一員として、日本や日本人の役割について考えようとする。 エ外国語で意思の疎通ができるようになる。
情報	様々な学習や生活との関連において、多くの情報の中から自分に必要な情報を収集・選択し活用することができる。情報の積極的かつ責任ある発信ができる資質や能力を育てる。	ア情報収集と活用 イ責任ある情報の発信	ア課題や目的に応じて情報手段を適切に活用し、必要な情報を収集・選択・整理・処理し、生活に生かすことができる。 イ社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼす影響を理解すると共に、受け手の状況などを踏まえ責任ある情報の発信ができる。	ア課題や目的に応じて情報手段を適切に活用し、収集・選択した情報を判断し、分析すると共に生活に生かすことができる。 イ社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼす影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする。
環境	身近な自然に積極的にかかわり、自然のもつ豊かさや大切さに気付き、生活と環境とのかかわりについて理解を深め、自然と共生し、自分にできる方法での環境保全やよりよい環境を創造する資質や能力を育てる。	ア自然に対する感受性や環境への関心 イ環境問題と生活様式とのかかわりについての理解 ウ環境保全やよりよい環境創造のために、主体的に行動する実践的態度	ア多様な視点や論理で地球規模の自然を見直し、自然保護に必要な生活の在り方を考える。 イ生産・流通・消費といった人間の生活の営みが様々な面で環境に影響を及ぼしていることを理解する。 ウよりよい環境創造、経済活動や生活様式の変化など多面的な視点から環境問題をとらえ、自分ができること考えたり、実践したりする。	ア地域規模・地球的規模の環境問題、自然破壊等を多様な視点から科学的に分析し、産業と自然や環境とのあるべき姿を考える。 イ人間と環境との関連性を幅広くとらえる中で諸矛盾を見出し、人間の責任や役割について理解し、よりよい自然との共生について考える。 ウ環境問題の解決やよりよい環境の創造のための取組の裏にある諸矛盾に気付き、将来にわたって考えていかなければならないことは何かを考え、自分なりの日常実践を行う。
福祉	自分を含め、様々な人々がそれぞれに生きがいをもって生きようとしていること、そのためにお互いに助け合	ア他者への尊重・敬意・思いやりなどの豊かな人間性	ア地域の人々との交流や体験活動を通して、高齢者や障害者などを正しく認識すると共に、互いの違いや個性を認め合い、尊重し、思いやりをもって接する。	ア誰もが障害をもつ可能性があり、高齢者になることを前提に、高齢者や障害のある人々は特別な存在ではないし、その人格が尊ばれ、一般の社会のなかに普通に参加し、

社	<p>っていることを理解し、より一層充実した福祉社会の実現に貢献する資質や能力を育てる。</p>	<p>イ福祉にかかわる社会の特質・問題の理解と、介護・福祉などの課題についての認識</p>	<p>イ高齢者や障害者などの置かれている現実など現代社会の福祉にかかわるの現状や問題点をとらえと共に、ボランティア活動などの体験等を通して福祉に対する認識を深める。</p>	<p>平等に生きる権利があることを認識する。</p> <p>イボランティア活動などを通して様々な福祉にかかわる問題を認識し福祉政策や社会的諸サービスが対等の生活原理であることが分かる。</p>
生命健康	<p>生命のすばらしさや尊さに気付き、自他の生命を尊重する心をもったり、心身共に健康で安全な生活を営んだりすることができる資質・能力を育てる。</p>	<p>ア生命を尊重し、大切にしようとする態度</p> <p>イ健康で安全な生活についての理解及び実践する能力や態度</p>	<p>ア自分自身の生命をはじめ身の回りの様々な生命が互いに関係し合い生かされていることに気付き、生命の尊さや自他の生命を尊重しようとする心をもつ。</p> <p>イ健康で安全な生活を送るために運動・栄養・睡眠・食事などの多面的な視点から自分の生活を見直し、科学的な追究を基によりよい生活環境を創造することができるようにする。</p>	<p>ア生命について自然科学・社会科学・倫理等の面から考えたり、過去と現代人の考え方などを比較したりしながら、自他の生命に対するとらえ方を振り返り、生命を尊重しようとする心をもつ。</p> <p>イ健康で安全な生活を送るためにエイズなどの感染予防についての基礎的な知識をもつと共に、そこには偏見や差別が存在することを人権や道徳の面からとらえるようにする。</p>
地域	<p>自分たちが暮らしている地域に愛着をもち、家庭や学校を含めた地域の生活上の諸問題について理解を深め、自他を尊重しつつ、地域社会の一員としてよりよい民主的な生活の実現に意欲的、協力的に取り組もうとする資質や能力を育てる。</p>	<p>ア地域の伝統・文化・行事・生活習慣・政治・経済・産業などの現状や問題点の理解</p> <p>イ地域や学校等の行事や活動、生活上の問題等の解決に向けて自他を尊重して協力的に取り組もうとする態度</p>	<p>ア地域や生活上の問題について地域の専門家や様々な立場の人の意見を聞いたり、客観的、科学的にとらえたりして解決の方向性を探る。</p> <p>イ地域社会を構成する一員としての自覚と誇りをもち、他と協力してよりよい郷土の創造を目指した取り組みを行う。</p>	<p>ア地域社会の現状や問題点を政治、経済、産業等、多面的、多角的な視点からとらえ分析・判断し、解決しようとする。</p> <p>イ地域社会を構成する一員としての自覚と誇りをもち、自他を尊重しつつ、よりよい社会の実現を目指して、その発展に尽くそうとする。</p>
進路	<p>職業の大切さや労働の意義について理解すると共に、自己の適性や将来について考え、個性豊かによりよく生きていくことができる資質・能力を育てる。</p>	<p>ア具体的な活動や体験を通しての職業観・労働観の拡充</p> <p>イ自己の価値観の確立</p>	<p>ア職業調べや職場体験を通して、働くことの喜びや厳しさ、働く人たちの仕事に対する思いや責任感にふれ、労働の意義について考える。</p> <p>イ自己の適性や将来の職業選択を視野に入れ、自己を高めいくために何が必要か考え、取り組もうとする。</p>	<p>ア職業調べや職場体験等を通して、職場には性差や制度による様々な問題点のあることを科学的に理解し、自己の職業観を振り返る。</p> <p>イ現在や将来を真剣に考え、様々な社会参加の在り方や生き方の選択肢があること、生きがいをもって充実した人生を送ることの意味等を考える。</p>

な価値的な育ちを身に付けてほしいのかを考え、そのためには、どのような単元を組み、子どもたちに身に付いたかを評価していくために、内容系列表を基にしていけばいいわけである。

また、この試案では、小・中学校間に一貫性をもたせたものとなっている。今後は、各中学校区内を単位にしながら、小・中学校の連続性を視野に入れて内容編成することが望まれる。

(2) 実践校の紹介

群馬県富岡市立一ノ宮小学校

①学校所在地等

・学校の所在地 〒370-2452 群馬県富岡市一ノ宮16番地

・現在の学年別学級数及び児童数

学 年	1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	5 学年	6 学年	特別支援	合 計
学級数	2	2	2	2	2	2	1	13
児童数	74	75	72	69	64	77	2	433

・教職員別人数

校長	教頭	教諭	養護 教諭	事務 職員	非常勤 講師	教員補 助員	心の教室 相談員	図書 事務	校務員	合 計
1	1	19	1	1	4	1	1	1	1	31

②学校の沿革

本校は、富岡の中心部から西へ3km、「一番初めは一ノ宮」とうたわれるように国指定重要文化財の貫前神社の門前町として発達してきたところである。歴史的建造物や古墳、城跡、郷土芸能などの文化財が数多く残されており、歴史学習や地域を学ぶ学習には、適している。さらに、公民館、郵便局、消防署、合同庁舎等の施設も有し、多様な学習の場や機会を提供できるところである。保護者の教育的関心は高く、PTA活動を始め、学校の教育活動へも協力的である。児童は、明るく活動的であいさつや返事などもよくできるよい面がある。反面、自然体験や社会体験などの不足から、自立の遅れや社会性の低下が心配されるところがある。保護者にアンケートをとったところ、主体的に進んで物事に取り組む姿勢や思いやり、協調性などの伸長が期待されている。

本校は、平成11年度より文部科学省指定の研究開発学校として3年間、総合的な学習の時間の研究に取り組んできた。「自ら問題解決に取り組み、仲間と共によりよい生き方を追求する児童」を育成するため、学校や地域の特色を生かした総合的な学習の時間を創設し、各教科等との関連を図りながら、これからの教育課題に対応する教育課程の編成・実施の在り方を探ってきた。また、総合的な学習の時間の目標・内容・評価系列表を作成し、年々更新をしている。

昨年度は、新学習指導要領の実施に伴い、「夢・人・里」の時間（総合的な学習の時間）の年間指導計画の整備、単元開発の改善・充実、評価の改善・充実（とりわけ、振り返り活動を通して自己評価・相互評価の推進）を図ることを目標に努力してきた。

本年度は、児童の表現力の育成に力を入れ、各学年ごとに目標を設け、研究・実践を進めている。

群馬県前橋市立芳賀中学校

①学校所在地等

・学校の所在地 〒371-0131 群馬県前橋市鳥取町796番地

・現在の学年別学級数及び生徒数

学 年	1 学年	2 学年	3 学年	合 計
学級数	3	4	3	10
生徒数	116	122	118	356

・教職員別人数

校長	教頭	教諭	養護 教諭	新採研指 導教諭	補充 教諭	ALT	合 計
1	1	17	1	1	1	1	23

②学校の沿革

本校は昭和22年創立。その後、昭和58年に現在の校舎となる。

教育目標として、心身ともに健康で、高い知性と特性を持ち、よいことをすすんでする生徒を育成することを掲げている。

また、学校のスローガンである「学べ 鍛えろ 夢を持て」が校舎に大きく飾られ、生徒および職員がそれに向けて日々努力している。

今年度の重点の一つが生きてはたらく「基礎学力」の充実である。その中の具体項目の一つが「ねらいにせまる総合的な学習の時間の計画作成と適切な実施及び改善」であり、本年度より取り組んでいる。

(3) 年間単元指導計画の作成

実践校の年間単元指導計画の一部を以下に示した。実施学年、実施時期（期間）、単元名、単元の目標、実現する内容、単元の評価規準である。

富岡市立一ノ宮小学校の単元「世界へとびだそう！ぼくらは地球人」では、前出の富岡市立一ノ宮小学校内容系列表に示された「国際理解」「文化伝統」の2つの内容を指導しようとしていることが分かる。

前橋市立芳賀中学校の単元「自分とのかかわりを考えながら、身の回りの課題を調べみんなに発表しよう」では、内容系列表（群馬県教育センター試案2003年版）の「生命・健康」の内容を指導しようとしていることが分かる。

富岡市立一ノ宮小学校

<小学4年>

月	単元	単元の目標	内容領域	単 元 の 評 価 規 準
---	----	-------	------	---------------

<p>5 2 11 — 全 7 0 時 間 — 地 球 人 ▽</p>	<p>△ 世 界 △ と び だ そ う ！ ぼ く ら は 地 球 人 ▽</p>	<p>世界の国々や外国の人々の生活、文化などを調べたり、地域に住む外国の人々と交流したりする活動を通して、自分たちと外国の人々の生活や文化には、それぞれ特色があることを知るとともに、外国の人々と仲良くしたり、外国の歴史や文化に進んで親しむことができる。</p>	<p>○文化伝 統・国際 理解</p>	<p>○関心・意欲・態度 ①外国の人々の生活、文化などについて積極的に調べたり、地域に住む外国の人々に聞いたりする。 ②外国の人々と接することに関心を持ち、積極的に外国の人々や文化とかがわろうとする。 ○思考・判断 ①外国の人々や文化について、調べる計画をたて、見通しをもって調べることができる。 ②自分たちの生活と外国の人々の生活との違いや特色を考慮することができる。 ③日本に住む外国の人々がこまっていることを考えたり、自分なりに外国の人々に対してできることを考えることができる。 ○技能・表現 ①自分たちが考えたり、交流したりしてきたことを他の人に分かりやすく伝えるために、用紙や道具を適切に使うことができる。 ○知識・理解 ①外国の人々と自分たちとの間には、考え方や生活の仕方、文化などにそれぞれ特色があることに気付くことができる。</p>
---	--	--	-----------------------------	--

前橋市立芳賀中学校

<中学1年>

月	単元	単元の目標	内容領域	単元の評価規準
<p>9 2 11 —</p>	<p>△ 自 分 9 と 身 の の か 回 り の わ り 課</p>	<p>食を中心とした人間と他の生物とのかかわりについて調査したりディベートを通して、自分自身の生命をはじめ身の回りの様々な生命が互いに関係し合い生か</p>	<p>○生命・健康</p>	<p>○関心・意欲・態度 ①人間と他の生物とのかかわりを積極的につかもうとしている。 ②人間と他の生物の生命の大切さを見いだそうとしている。 ○思考・判断 ①人間と他の生物とのかかわりを見出し、まとめることができる。 ②生命の大切さをいろいろな視点から捉えることができ</p>

全 3 0 時 間 —	を題 考を え調 なべ がみ らん なに 発表 しよう ✓	されていることに 気づき、生命の尊 さや自他の生命を 尊重する心を育て る。		る。 ③自己を振り返り、自他の生命を尊重しようとする気持ちをもつことができる。 ○技能・表現 ①情報通信ネットワークや図書資料などを利用して人間と他の生物とのかかわりを調べることができる。 ②人間と他の生物とのかかわりをとらえ、自分なりに調べることができる。 ③自分の考えをわかりやすく発表することができる。 ○知識・理解 ①人間と他の生物とは様々なかかわりがあることがわかる。 ②生命の大切さがわかる。

(4) 単元指導計画のフォーマットとその作成要領

単元指導計画は、第Ⅱ章第5節に示されたフォーマット及びその作成要領に沿って作成することにした。

すなわち、①単元指導計画の対象学年及び担当者の決定→②単元名及び学習活動の決定→③単元設定に関わる「教師の願い」の決定→④単元設定に関わる「子どもの実態」の記述→⑤単元の目標の決定→⑥単元の評価規準の作成→⑦学習過程における単元の評価規準の具体化と評価資料の決定→⑧評価資料（略）→⑨評価基準の設定→⑩評価の3つの機能への対応計画の決定の順に沿って単元指導計画を作成することにした。

以下、本県なりに工夫した点や留意した点などを、実際の取組を踏まえて記すことにする。

<単元構想に関して>

単元構想の段階で、これまでの学習経験や生活経験、実践の蓄積などから考え、子どもの求めを出発点として、活動の広がりやつながり、活動の展開途上で出会い解決していくであろう問題、結果的に学ぶであろう価値的な内容等を想定する。その時の道具立てとなるものとしてウェビングなどが考えられる。教師の教材研究としてウェビングを用いる場合、まず、紙面の中心に題材や活動名を書き、それをめぐって展開されるであろう活動や教育的な価値内容を書き出す。次に地域や学校、学年、学級の実態を考えながら、ウェビングマップを眺め、子どもたちがこのマップ上をどのように進み、どこで立ち止まり、そこで何を考えるか予測する。それと同時に、それぞれの場所でどのような価値的な内容を学ぶことができるかという可能性を考える。さらに、そのためには、どのような支援をすればよいかシミュレーションし、展開可能な道筋を探る。これによって、単元のアウトラインをデザインすることが考えられる。さらに、子どもの自然な意識の流れに沿っているか、価値的な内容（内容系列表の内容項目）が学ばれる流れになっているかなどを見直し

ながら単元指導案の様式に仕上げていく。

＜②：単元名及び学習活動の決定に関して＞

単元名は、そこで児童生徒のどのような問題解決が展開されるか分かるようなものがよい。次に、そのような問題解決の活動を通して実現される内容を検討する。これは、各学校で編成する内容系列表に示されているものである。

その際、活動と内容が教科（生活科を除く）のように1対1で対応しないことが多い。これが経験単元の特色ともいえる。

生活科を例に考えてみたい。生活科は、その多くが経験単元で構成されている。「あきみつけ」の単元では、児童がやりたい活動である秋の公園に行って楽しく遊ぶ活動を通して、結果的に内容（4）「公共物の利用」、内容（5）「四季の変化」、内容（6）「遊びの工夫」などの複数の内容を実現するようにする。活動と内容が1対多で対応する。したがって、一つの単元で複数の内容が実現されることがある。「総合的な学習の時間」についても同様のことがいえるのである。

＜③～④：「教師の願い」の決定及び「子どもの実態」の記述に関して＞

単元指導案を作成するときには、考察（単元設定の理由）として単元にかかわる児童生徒の実態と、この単元を通して目指したい子どもの姿（教師の願い）を記述する。その際、「総合的な学習の時間」についても教科と同様に観点別に記述する。

すなわち、この単元を通して学習指導されることになる内容や望ましい児童生徒像を教師の願いの欄に、単元の指導展開の概略とともに記述する。次に、教師の願いから現実の児童生徒像の実態を観点ごとに明らかにして、その特質を子どもの実態の欄に記述する。具体的には、その題材にかかわる現在の子どもの関心・意欲・態度の状態を書き、この単元を通して実現したい関心・意欲・態度の状態を書く。同様に思考・判断、技能・表現、知識・理解についても記述していく。これによってどのような活動を組み、どのような投げかけをし、どのような支援をすればよいかが見えてくる。

＜⑤：単元の目標の決定に関して＞

既述の内容に基づきながら単元の目標を決定していく。その際、留意する点として、これまで四つの評価の観点別に目標を記述していた学校もあるようだが、ここでは、単元の評価規準として記述されることになることを考え、単元の目標は「～という活動を通して、・・・に気付き、を考え、を理解し、表現し、～～ができるようになる」というように一文で表すことにした。

＜⑥～⑦：単元の評価規準の作成に及び学習過程における単元の評価規準の具体化と評価資料の決定に関して＞

単元の目標を四つの評価の観点別に具体化したものが単元の評価規準になる。評価規準を幾つ設けるかは単元の目標によって変わってくる。次に、指導計画（活動の展開と評価計画）を作成する。学校ごとに決められた様式があると思うが以下のようなフォーマットを使うこととした。

「活動の展開と評価計画」のフォーマットの例（丸数字は観点別の評価規準を示している）

学 習 活 動	支 援 (方法・内容)	評 価 規 準				評 価 資 料
		関意態	思判	技表	知理	

今回の総合的な学習の評価の取組は、この上記の役割の具体化を図ろうとしたものである。

①指導と評価の一体化の工夫

子どもの学習のつまずきが学習過程のどこで起こったのか、指導のどこを改善すればよいかといったプロセス重視の評価が行われることが大切である。この営みは授業の最初から最後まで絶えず進められなければならない。教師は、そのためにあらかじめ策定した単元指導計画に基づき指導を行う。そのもとで、子どもが学習活動を展開する。

教師は、観点別の評価規準の実現状況を学習の過程及び成果に関する学習資料・情報を基にA～Cの絶対評価をする。その評価結果を基に、指導計画を予定通り進めるか、あるいは修正・改善するかを判断し、その後の指導に臨む。これを1サイクルとする指導と評価の連続が指導と評価の一体化の実質であると考えられる。

実践事例には、学習過程上にプロットされた各評価基準の評価場面ごとに、それまでの指導の特質を記述し（①指導・学習の過程）→子どもの学習資料・情報から単元の評価基準の実現状況を評価して記録し、考察する（②評価結果）→評価結果に基づいて次の指導をどのように改善し指導したかを記述（③指導の改善と実施）の体裁を工夫した。

②自己学習力の向上に向けた工夫

「生きる力」の育成のためには、児童生徒が自分で学習目標を決め、そのための計画を立て、友達と協力しながら自己追究し、その問題解決の過程で絶えず自己の活動の過程及び成果を学習目標に照らして評価し、やがて解決にいたるという自己学習力を身に付けることが大切である。

今回、各単元ごとに自己学習力の育成と向上を意図して取り組んだ。その際、二つのレベルを考えた。一つは、教師主導のもとで児童生徒が学習活動及び評価活動を展開するというレベルである。もう一つは、教師の支援のもとで児童生徒が自己の目標なり評価基準を定め、その実現に向けた学習活動を展開し、その学習の過程及び成果を振り返る（自己評価する）といったレベルである。

<第一のレベル>への対応

ア、教師による問題解決授業の工夫

児童生徒が一連の問題解決を行う授業と、その中で自己評価を求めるような発問等に取り組む。

イ、授業中に実施する具体的な評価活動における工夫

- ・評価基準を予め説明してから児童生徒の自己評価を求める。
- ・学習カードにコメントしたり、アンダーラインを引く場合、教師の意図（評価規準や評価基準等）が児童生徒に伝わるようにする。
- ・学習カードへの記述を求める際、予め学習カード等を提示したり、その評価基準を説明したりする。
- ・集積していくポートフォリオを授業中に活用し、学習のあとを振り返り、次に備えたり、授業終了時にまとめポートフォリオを作成する。さらに、家庭に持ち帰り保護者のコメントをもらい、次の学習に活用する。

<第二のレベル>への対応

ア、例えば中間発表を経て最終発表に向けた活動に取り組み、最終発表に臨むといったような機会なり場面をとらえ、児童生徒が自己の目標なり評価規準、さらには評価基準を設定し、活動を展開し、その跡を振り返る（自己評価）といった評価活動を展開する。なお、第一レベル、第二レベルを問わず、いずれのケースの評価活動においても、実施したそれぞれの評価の工夫について児童生徒から感想なり意見を求めることとした。

③外部への説明責任に向けた工夫

保護者等外部への説明責任に向けた評価のためには色々な機会や場面における工夫が考えられる。とりわけ指導要録の作成や通知表の作成も視野に入れながら、各単元における総括的評価及び個人内評価の工夫を行った。

<単元ごとの総括評価に向けて>

既述の通知表や指導要録への記載のためにも、単元ごとの評価結果を残しておくことが必要である。年間1単元であっても途中の評価結果を適宜保存しておくようにする。

次に、評価の4観点別に作成する単元の評価規準の実現状況を複数回以上評価することにしたが、いつ、どの場面における評価結果をその単元における総括的な評価結果として保存するかが問われることになる。

その場合、単元に応じて柔軟に考え、ある観点に関しては指導と学習の過程で複数回以上にわたって行ったすべての評価結果の総和を出して総括的な評価結果としてもよいし、ある観点に関してはある一部の特定された場面における評価結果で代表させてもよいことにした。

また、評価結果を文章記述するにしても評価結果の得点化を考えておけば好都合であると考えたところから、評価規準の達成状況を判断するための評価基準を3段階に区分して具体化し、それぞれ「A：十分に満足できると判断されるもの」を3点（80%以上相当の達成）、「B：おおむね満足できる判断されるもの」を2点（60%～79%相当の達成）、「C：努力を要すると判断されるもの」を1点（59%以下相当の達成）として考えていくことにした。

さらに、次の図のような学習活動の展開に沿って評価される各4観点別の評価結果を個人ごとに記録していく「個人評価結果表」を作成することにした。縦列に児童生徒の氏名欄をとり、横欄には学習活動の展開に対応しながら評価される具体的な評価規準を記しておく。そして、縦列と横列の交差するセルに、児童生徒ごとの評価基準に基づく評価結果（A、B、Cないしは3、2、1）を記入していく。

個人評価結果表

学習活動		学習活動1		学習活動2-①		学習活動2-②		
氏名	評価基準	関①	思①	関①	技①	関②	思②	知①

このような「個人評価結果表」を作成しておけば、指導・学習の過程における評価結果

の状況を即時に算出し、事後の指導・学習に生かしていくことが容易になる。また、単元終了時における学年あるいは学級全体の、あるいは個々人別の、観点別総括評価結果の算出も容易に行える。

なお、単元の総括的評価に関連して、中には、必ずしも評価の四つの観点それぞれを等価的には扱わず、単元に応じて4観点相互の重みを変えて評価していこうとする論調もみられるが、今回、評価の四つの観点はどの単元においても等価的に扱っていくことにした。なぜなら、評価の四つの観点はいずれも自己教育力の育成を構成する資質や能力であり、どれ一つを欠いても児童生徒の学びは成立しないと考えるからである。

＜単元における個人内評価に向けて＞

総合的な学習の時間においては、「児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価すること」という個人内評価を行うことが力説されている。その際、教科と同様の評価の4観点を踏襲しながら個人内評価を行うことが可能であると考えた。評価の四つの観点相互の発達的特質をみれば（＝観点間経時的評価）、子どもの発達の強みなりよさや課題がみえてくるし、また、四つの観点それぞれごとの発達的特質をみれば（観点内経時的評価）、それぞれの観点におけるその子どもの伸びや進歩の状況がみえてくると考えた。

まず、観点間経時的評価についていえば、例えば単元の総括的評価結果をみれば、その子どもが評価の4観点別にそれぞれいかなる評価結果を得たかが分かる。四つの観点ともに十分に満足できるように育ったか、あるいは、ある観点の育ちが他の観点到比べて遅滞しているかなどが分かる。そして、このような四つの観点相互の発達的特質を指導・学習の流れに即して、その推移的特質を明らかにする。そして、このような評価の四つの観点相互の縦断的特質に関する評価結果を次の指導の改善に生かしたり、あるいは子どもに、そして保護者に、返しながら子どもの自己学習力の向上に活用しようと考えた。

観点内経時的評価に関していえば、評価の四つの観点別に、それぞれの観点における育ちを指導・学習の最初から最後まで時系列的に追えば子ども個々人ごとの伸びや進歩等の発達的特質が明らかになる。そして、これらの評価結果を、適宜、指導の改善に生かしたり、子どもの自己学習力の向上に役立てることが計画された。